

放送授業 <ラジオたんぱ> 慶應義塾の時間

ラジオたんぱ
第一放送
3.925・6.055・9.595MHz
毎週月～金曜日
22:00～22:30

慶應義塾の時間「三色旗」(毎週金曜日) 平成12年6月の番組

タイトル・放送日

担当者

哲学の最前線としてのヘーゲル：『精神現象学』の新しい読み方

国士館大学非常勤講師 黒崎 剛

19世紀のドイツの哲学者、G. W. F. ヘーゲルの主著の一つである『精神現象学』は近代哲学の総決算というべき書であり、20世紀の哲学の諸潮流に大きな影響を与えた帝王的な作品としても知られています。ヘーゲルがこれを書いた目的は、「われわれの主観的な意識によってどうやって客觀の真理を知ることができるのか」というデカルト以来の近代知の限界問題にけりをつけ、人間が真理を認識する際の「意識のふるまい」を「意識の経験」という方法を通して明らかにしようとしたことです。しかし彼は、この主觀－客觀の分裂構造を克服するという問題に、近代市民社会の形成とその矛盾の克服(精神の現象)という問題を重ね合わせ、その結果この本は「意識の経験の学」＝「精神の現象学」という、認識論と存在論とを癒着させた二重性格を持つ書物として完成することになりました。

この癒着の結果としてできあがったヘーゲルの社会認識上の方法論的な枠組みは、自覺的であるか無自覺的であるかにかかわらず、その後の社会科学者たちの多くにはほぼそのまま踏襲されて、ソビエト崩壊後の社会科学の混乱状態をつくりだす大きな一因になっていると私は考えています。

以上のような見解は、ヘーゲル研究においても現代哲学においても一般的な意見だとは言えません。しかし、私は今回この観点からこの本を読み直し、そのあらすじを追ながら、この二重性格がどうして生まれたのかを明らかにし、そしてあわせてこの二重性格を解消して「意識の経験の学」を徹底化することが、現代哲学の最前線の問題になっているということまで述べてみたいと思います。

放送授業

慶應義塾の時間
「三色旗」
(毎週金曜日)
平成12年6月
の番組

6月2日 ▶ ①序論：『精神現象学』の課題と全体像

9日 ▶ ②「意識の経験の学」という方法とその展開

16日 ▶ ③認識論から社会形成論への軌道修正

23日 ▶ ④ヘーゲルの方法論の問題点

30日 ▶ ⑤社会認識の新しい方法論